北日本新聞　（第3種郵便物認可）

知いたい！ 治療の最前線 ◇14

医療事故を防ぐ

小さな間違いも報告・分析

院内巡回で安全確認

皆さんが病院を選ぶ基準は何でしょうか。まずは、専門医がそろっていて、設備が整い、サービスが行き届いている病院を考える方が多いと思います。加えて最近は、安心して安全な医療を受けることができる病院を希望する患者さんが増えています。

一口メモ

医療の安全について心配なことがあれば、まず主治医に相談することが大切。それでも、不安や納得のいかないことがあった場合には、病院の医療安全担当のスタッフか、患者相談を受け付けている窓口などに相談してみる。

山崎 光章
富山大附属病院
医療安全管理室長
麻酔科学講座教授

医療の安全性に対する意識の高まりは、横浜市立大の患者取り違え事件（1999年）や群馬大の腹腔鏡手術死亡事故（2010～14年）など、医療不信を抱かせる事案が続いて生じたことが原因ではないかと思われます。富山大附属病院では、患者さんが安心して受診できるように、医療安全を専門に扱う医療安全管理室を01年に設置しました。現在、医療安全を専門に扱う医師4人が在籍し、看護師、薬剤師、臨床工学技士、事務官とともに活動を続けています。

ヒヤリ・ハット

医療事故などにおける経験則「ハインリッヒの法則」によると、一つの大事故が起こる背景には29の軽微な事故があり、さらに300件の微小事故が存在するといいます。当院の医療安全管理室では、医療現場で生じているちょっとした間違い（ヒヤリ・ハット）を医療者側から積極的に報告してもらい、それらを分析して対応策を考えます。現場にフィードバックすることで、小さな事故を未然に防ぎ、大きな医療事故を発生させないように努めています。

さらに、安全な医療が現場で確実に行われているかどうかをチェックするため、定期的なラウンド（院内巡回）を行っています。当院では年4回、専門家による医療安全の講演会を開き、ビデオ視聴も含めて全職員が受講しています。新規採用の職員についても、医療安全の講習を受講してから初めて業務が行えるような仕組みを取り入れました。

群馬大で生じたような事故を2度と起こさないため、新たな医療技術を行う際には、医師の経験や専門医資格、医療体制などを厳格に審査した上で実施するようにしています。ご不幸にも当院で亡くなられた患者さんについては、その経緯を調べ医療安全上の問題がなかったかどうかの検討しています。

こうした取り組みを通じて、医師・看護師をはじめとする職員全員が医療安全に深い関心を持つようになり、病院で生じたヒヤリ・ハットを医療安全管理室に積極的に報告する土壌を形成してきました。

丁寧な説明

病院では、安心・安全な医療が行われるように、患者さんの協力を得ながら、さまざまな取り組みを行っています。診察時に、患者さんにはフルネームでの名前と生年月日を言ってもらい、本人であることを確認しています。また、検査結果などは、患者さんと一緒に確認するようにしています。

侵襲の加わる医療行為を行う際には、担当医師は丁寧にその内容や予想できる効果、重要な合併症について説明し、患者さんの十分な理解のもとに、同意をいただいております。さらに、医療安全に関する疑問・質問を医療福祉サポートセンターの患者相談窓口で随時受け付け、対応しています。

当院では全職員が、医療安全が病院の果たすべき最も大きな使命であると認識しています。そして、医療安全管理室では、医療安全に対して最大の注意を払うように医療従事者の意識を改革し続け、安心・安全な最新の医療を提供できるように、日夜努力をしています。

◇

次回は10月1日に掲載します。

富山大附属病院で定期的に実施するラウンド（院内巡回）。医師や看護師、臨床工学技士らが、医療が安全に行われているかどうかを確認している